



俳諧
一茶
句集
上

伊地知文庫
文庫20
356



上野法坂本町本所番場よりあるは
をり八重山折燈をとりしおきく燈を
生かかへておき来り納の時におきか
とてりし店屋より折燈をとりし燈
かきみお料具を掛てありしおきか
かきへておき来りし燈をとりし燈
とてりし燈をとりし燈をとりし燈
おきかへておき来りし燈をとりし燈
多し燈をとりし燈をとりし燈

願を納き燈をとりし燈をとりし燈
は家一世の燈をとりし燈をとりし燈
の多き家におきかへておき来りし燈
集りてありし燈をとりし燈をとりし燈
燈の多き家におきかへておき来りし燈
おきかへておき来りし燈をとりし燈
おきかへておき来りし燈をとりし燈
おきかへておき来りし燈をとりし燈
おきかへておき来りし燈をとりし燈
おきかへておき来りし燈をとりし燈

一具序

書肆河某おのり進子まわつて刪補を
まふを記するなりしに河内いりし集
法上より他の所底を録りしなりし記
息やうしたるいしをえくをいふを
ていふるは始に法をきき書を

りしとら

弘化丁巳誕生

徳沙孫一具

河内いりし集のり進子まわつて刪補を
まふを記するなりしに河内いりし集
法上より他の所底を録りしなりし記
息やうしたるいしをえくをいふを
ていふるは始に法をきき書を
りしとら

春立や燕のくまもさしあふる

新家集

春立や白おちけり——四

何れも春立のくまもさしあふる

初春くまもさしあふる

学舎 二句

菴の春立を属する程を意あり

我春も上り告げりくまの

三崎の井を遊女柏木の

水ぬきくまもさしあふる

菴の春立を属する程を意あり

我春も上り告げりくまの

蓮葉の南無くと云ふは

富士の画子

初春や子代はたきくまもさしあふる

初春も月夜とありぬ人の

長谷の山中に遊女

我も春立は清僧の歌なり

福も春立は清僧の歌なり

小児の河をけり

かき桐子の穂てきくぬ門の松
袴着て芝子あふまると子の白うね
折るききせぬものも門の字の
小松引くとく人のおのむおき
我度や希さの年五たみま
初夢子猫も不二なる森やう哉
迹一ちやお祝う五十聲
大聲や廿日色々の清茶葉
明猫子赤目とて子さううね

轉の画子

人の身小きつの子代やさみきん
賜差の柄子あうくうあ葉うね
垢取や葉の前の古きつうき

天祥系

ちきの子は麻上下や梅のきれ
梅の本や秋や新をぬるの月
梅折や溢るきくくく大聲の
梅の本はあふかあもきぬ山家うね
餅組も一きききききわは
春はあきうねとせは葉の梅

梅は月以てやまかゝるにありては
寂しげに花をばらけしめ梅の香

園十部

咲くは江戸生花きのつれは
梅折やと哀めしうらな法師

信濃玄葉

赤い梅より花のそらおれは梅の香

相馬関古

梅の香やほ親玉のほ月夜
梅さくらや唐土の香も春の先

月乃梅彫の志んやのころもさ
笠もさやう先の咲日を昔日や

山崎より梅の香

二歩刺の初雪やうら梅の香
下戸村や志んやうら梅の香

梅の香を盗めとさす月夜の
梅の香と人よを法華よ梅の香

高原

入口はあはれ梅の香をばらけしめ

皮剥く縁より柳をよみたる
葉は夕をたのむやさし柳
の柳を哀つとけり遠くより
人知りしりたれども柳より柳
大の子はぬきとて成る柳より
あつとく人として鳥と柳の事
暮光を垂る

白猫のやうな柳も清花より柳

柳海山

夢も親子はと先や梅より

三月の月を梅より梅より 暮しの
葉もあはれなくのりおとほねの
秋の柄も葉もあや小梅もあは
暮は目利しとなく我家の柳
是程の上葉を田舎の柳
葉はあはれなくもや組屋鋪
袖下をくれ葉もあはせぬ

松室より

暮はあはれなくもや組屋鋪
葉もあはれなくもや組屋鋪

此の如く 露人 了 著 以 小 家 九

其母の十の筆契

門 為 也 宋 の 字 多 け 故 空 存 水
空 解 也 門 之 崔 乃 十 五 日
江 之 舟 一 也 志 多 人 之 法 水 子 涉 之 空
綿 の 尻 舟 舟 之 一 之 空 存 舟 舟 舟
空 解 也 陸 舟 之 三 止 立 回 舟
世 子 江 舟 の 志 多 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟
卷 の 空 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟
舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

三の月 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

蕨 入 也 三 組 一 所 舟 舟 舟 舟 舟
蕨 入 也 蕨 の 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟
舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟
舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟
蕨 入 の 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

店 舟 契

福 の 来 舟 門 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟
か 之 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

初 年

花の世を曾ては狐鳴ぬも市の
 島も持てぬ口よと走つては種
 表も入直し〜も信を信りぬ
 山鏡の鳴り下る表毎入り火
 物打也子う遠歩り信〜一系
 畑打也田轉帰〜る切〜を
 一年を〜る〜るを〜る
 考り云人の〜る
 出代や汁の賣あとも〜る〜
 出代や汁の〜もおぬ〜橋の〜
 出代の市〜る〜る五十一頁

二月十五日の雪降るまで

ふゆのゆ〜る〜る雪の〜る但雪
 信福せんや〜る〜るの十五日
 小〜る〜る〜る〜る種如也
 森〜る〜る〜る〜る雪の降る
 森〜る〜る〜る〜る種如也
 藩公英の〜る〜る〜る種如也
 門番の〜る〜る〜る〜る種如也
 お〜る〜る〜る〜る〜る種如也
 〜る〜る〜る〜る〜る種如也

哀猶めぬりしをうらみなりきり
うらみ猶よめつしきけり又あそび
行いけり故縁候もあそび小田の居
彼岸より袖よ這りて風いし事

板橋

かきしや江左の居の陣り板
橋の居も結もは陣り居

至正月二十九年のついでに
御おこりし板橋の居に
板橋の居首よりいふ事
はたしや例の南田境の
事かかりしと云ふ事
小藪の家はひきりし事

川の上のあそびの事
川の面より土地丸赤く
くわりの名で田中ハ新
作りし事板橋の居に
いふ事かかりしと云ふ
事かかりしと云ふ事
交り代りし事かかりし

五百崎や舟舟をいし陣り居

善光寺

并橋子らや崔毛親子遊
崔子や川の中より親子遊
崔の子とあそびの事馬の遊り
舟子とあそびの事親子遊

我と来りて遊や親のたす心 雀
雀子やお作ぬ来の流しとて
慈想とこれハ養をまゝとて雀の子
雀子たつやまのく焼れ子代の子
雀子あつやえん子と山の河やうみ
夕雀子のまゝとて雀の子
雀子のまゝとて雀の子
雀子のまゝとて雀の子

福生

お作ぬとてまゝとて雀の子

板よりとて雀の子とて雀の子
親かたとて雀の子とて雀の子
向くも雀の子とて雀の子
雀子のまゝとて雀の子
雀子のまゝとて雀の子
雀子のまゝとて雀の子
雀子のまゝとて雀の子
雀子のまゝとて雀の子
雀子のまゝとて雀の子
雀子のまゝとて雀の子

我度や性初つりつる老を喘

南都

新起の古風を懐ぬと老の丸
夕乙有 我より望みの何れも
昼めしをた毎子ありつる
横家ゆゑはつゝとや夕乙も
那う大根ゆゑとあつゝの
其れ忙し世話をやの
非ゆゆ忙のを
小男若年手拭のせん南の端

小男若年の後つゝ南を枕の如
南おちつゝ御しあありゆめ若

奉納

おんあつゝ懐ゆまは
懐飛中は世に空を
もつゝも生進勢つゝ
大猫の尻尾を
懐飛中も空を
舞うつゝらんを
田子細子らん舞の小蝶の丸

山の峰々をのぞくは雲も霞も
小舟も若葉も蝶もあつた
春の夢やあはれを思ふは
あつた

あつたはあつたのあつた

春の信よとて春よとて他生の縁

橋本町上人

陽をよみゆくあつたは法法
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた

小倉原

あつたあつたあつたあつた

如く程の茶の玉吸ふなり
 大葉小葉喰ふをさう玉吸
 茶の口や多うも居ゆる茶
 之趣のちつと指やさる茶
 牽くく結根越さる茶の
 新布子大紅茶も茶の
 掃るの赤元結やさる茶
 餅買年茶振打茶の
 茶の白年大紅茶も茶の
 袖く茶の恒の茶も茶の

茶の白や喰進好くは鴨の嘴

茶甫新定安

茶塊く茶葉も茶のよさる茶

嬉禮

茶の白やお年お生茶松の
 茶の白や茶の茶の茶の
 茶の白の中茶の茶の茶の
 茶の白茶の茶の茶の茶の
 茶の白茶の茶の茶の茶の
 茶の白茶の茶の茶の茶の

水江喜巻

昔つあふも時や作らんさるは月
 法心無きこの二文後一や去の月
 結く一曰水心なれと回書くの如
 善風やとらる垣根の赤き履
 岩引子女と出さるりさるは
 老女水に日の水心も流るる如
 雲のふは牛を成出は日水心
 善風や牛子むの如く善光寺
 去は流の風おまん布は形りまふく

物の崩とるやうりまふは 風

不悲の池と喜ともの堂あり
 是れおとつたつたあまの宮なり
 此中御供養ありて善光寺なり
 是れ善光寺なり

永の日は流るるや時を池の邊
 永のや牛は流るる一里あり
 おとつたつたあまの宮なり
 我岩を何れもあはれを築き
 好くや此寺よりまふくは
 塊もあふおまのよは善光寺
 手のあつたつたあまの宮なり

上巳の歌

浦原の春の意の思ひを以て
 謀けをなすも上原をなすれり
 思懐ぬるのこゆるも春の聲も
 盃よりの流るるを三日月
 筆流るるおりの盃流るる
 川下も果を宴とりの水盃
 久よ春の聲も雀をけり
 如痛は醫
 品を折拍子とけり

おののけり事なき人かおあり
 かう活るるもやもさるるの陰

三月十七日保科信

花もちるやとけり木陰の小井帳
 人様もさるる人なり信
 おとろふや木を折るも口も
 おの木も静なる也(少)も

観音寺納

思ふの光もさるる河を過り
 山の月も盗人を思ふ

世に於ては如何なる他人のあつても
堪忍を以てしてゆえやむのけ

刈萱巻

世の世を地蔵おきつる親を
父の母はりつる生好も果報のれ

大和をんりきるんり採り
まゝまゝといふをまゝのち

かあるはよ迹をよそのこの世の世
その世や猶も物子の世らん
この中を我も父より園子のれ
苦の世は信や世の非あはれ

さうくも病毒をうつる世えん

新告糸

行灯を中へたそや世の世

法所

持実の腮をさくる様りの如
様くくんとそそ志んくを考ら
一本の様りもさういふ信は
はやくも末世を様くくけの如
人考りもあつていふささ
善より様りのけもあつて

お雪やお八女しの八重さささ
袖のけの初も櫻咲くし
山梅皮を剥きそくも
傘も傘さすりし付し梅のつゆ
天のりりても降るるやうに梅のり

お雪お八女隣 たるは 梅のりり
前の日より初し 重さささ
うにさすりしりりし止ぬさ
とそ望の命のつゆそののりり
たひしりりりりりりりりりり
懐中みえ集りりりりりりりり
あれはあはれ集りりりりりりりり
たるは

梅くさくさ咲きぬ 老あけりりり
一秋さす梅はさささささささ
下りりりりりりりりりりりりり
小坊さすや親の性しりりりりりり

雑雑歌

梅くさくさ梅のささささささ
梅ささささささささささ

我國をさすも梅を咲けりりりり
今もさささささささささささ
百両のりりりりりりりりりりり

山州や水野を来り乃子佐保
ちうは日ひ入所をうり藤次り

東海の水野敷くくく水
はくは山平くくく水
くくく水くくく水

煤くきき笠も梅は降り白の丸
夫の代の方見くくく梅の丸

根岩ぬく

山吹をきく半くくく水根の丸
熱くくく水ぬくくく水ぬく
水ぬくくく水ぬくくく水ぬく

やよきくくくくくくくくく

茶もはくくくくくくくくく
茶もはくくくくくくくくく
ゆきくくくくくくくくく

地獄

夕月や縞は中くくく啼田はし

餓鬼

古教や香くくく水もくく

畜生

教を以て佛も法も是れを以て其の

修羅

教を以て其の法も是れを以て其の

人間

教を以て其の法も是れを以て其の

天上

教を以て其の法も是れを以て其の

夏の歌

下谷一番は秋もくもくをくもく
おひらひ心表を若かり 夏衣
手ぬぐひ片手出はる子や 夏衣
夕ふの目や 秋もくもくをくもく 若衣
立あがり 縁もくもくをくもく 夏衣

又 藤の表をくもく けふ

おひらひ心表を若かり 夏衣

小児の心をくもく

たのりやてんはくそんのちり給
春日野は花子咲く移りゆ
南雲はくくそんは清よひやうた
人羅くそんはくくそんは

子 鹿

其のりてんはくそんはくそんは
くそんはくそんはくそんは

大山信

四五男は木吉力をいふと移りぬ
昔はあはくそんはくそんは

永のよりのりてんはくそんは

雀子もあはくそんはくそんは

うは子もあはくそんはくそんは

扇もあはくそんはくそんは

茶屋のあはくそんはくそんは

大江戸のあはくそんはくそんは

朝のあはくそんはくそんは

湯桶のあはくそんはくそんは

陸家や花をきくはくそんは

夕のあはくそんはくそんは

是の原ふのあゝんと仕うとまゝなうか
てもさうなも福おのあゝんりの柳
道崎より融子とて流や杜若

二十四年禁宗只一教書

善をそく一英をそく一ともまきのむ
業の本を坊主にさけりては法
布一さけて尋集の中をさるる事
柳のむ法垣はふ代のさるる事
柳のむ法垣はふ代のさるる事
我よ今もあゝんあゝんあゝん

かろくさうと強張るやあゝんあゝん
あゝんあゝんあゝんあゝんあゝん
あゝんあゝんあゝんあゝんあゝん
あゝんあゝんあゝんあゝんあゝん
あゝんあゝんあゝんあゝんあゝん

禪寺

あゝんあゝんあゝんあゝんあゝん
あゝんあゝんあゝんあゝんあゝん
あゝんあゝんあゝんあゝんあゝん
あゝんあゝんあゝんあゝんあゝん
あゝんあゝんあゝんあゝんあゝん

首の汁の水もそよふ如き
 世に出るはなす汁は
 若竹と啼くうらむ
 阿つをれの大木井
 蘇りある写と破るま
 老翁若子あつて
 一軸をさつて
 我汝を竹の中
 是つあはれは
 這度るはけの下
 時を俗を巻と
 時を俗を巻と
 時を俗を巻と

何れもたれも
 此の月のつら
 世をさす我を
 結海の糸
 時を破る
 舟のちりちり
 先任の法
 冥冥
 去日の舟月
 高野山

地獄へも行く美れと、軍古も
昔の世に おきくはく出の軍古も
吾をましくははきし一たり 墓
目出さきと今年の故も 晴さく
故の考もあはくもやぐあつ子ハ
宵越の至るも 晴さく 墓故の事
故柱のおよのしきき 振りの事
故の考もあはくもやぐあつ子ハ
我者の後進は 墓も 月報のれ
非國をまわす 墓もあはくもやぐあつ子ハ

屋の故は 墓もあはくもやぐあつ子ハ
我者もあはくもやぐあつ子ハ
際人へ 故もあはくもやぐあつ子ハ
屋の故もあはくもやぐあつ子ハ
故柱の考もあはくもやぐあつ子ハ
年暮の考もあはくもやぐあつ子ハ
墓の親毎 故もあはくもやぐあつ子ハ
年月の考もあはくもやぐあつ子ハ
屋の故もあはくもやぐあつ子ハ

昔よ老をくつてわ州の山家
 協の子をこゝろにのりて
 かきあつてやせしむるは女に
 中つて病を養ふもなほ通し
 烟しと幅幅の世にうかり
 いらぬあはれを武門の
 古俗あつてのけふのけふ
 羽織あつての目もく
 をけてと世に病をう
 孫りあつてはは数
 の養ふも

手あきの袖とあつてやせしむるは
 女に

妙義山

五月の田やあはれもかろ

粒と塔と并書

とろろのあやむき
 信濃路の上の上の中
 田とあはれ

身一つをこゝろにのりて
やせしむるは女

おのの里に病をう
 田とあはれ

任と

唐人古見よや田植の笛を 殺
子乙女や若年しつゝさるる家の
稽古笛田をいさくくさみさり
疾を法も一子のせんくや夏の月
夏山やをくくさる人の女を
あつさみさるくをいさくくさる月
小あつらや茶室の中夏の
花のちをくくさるけく咲みさる
花を竹の風をさ直りさる
新くよ懸目引をさるさ田く

夏之曲や二軒しつゝさる家の
源氏の影を

夕くあや男結乃垣りさる
日く懈怠不惜才陰

うみのりの持りつゝさる家の
いさき精を又もくくさる
手結や花をさる人精めくさる
さるれくくさる花にさる
歌くくさるの

頼のきぬをうらつ初若き子供これ
初巻法以とせれくる子風いりぬ
今た〜くわの川を越とよか 巻
ゆき布巻ゆ〜く人の味〜くち
大巻ゆ〜く〜く〜く通りも布巻

不忠池

巻火や啼〜魚〜飛ハ猿先へ
きれ〜く〜く巻と〜く〜く巻田川
夕月や火き〜く熱以〜く〜くつり
我袖を親〜く〜く巻いり遊〜く〜く家

理俗い〜く〜く〜く

は田の降ま〜く〜く〜く〜く
初や〜く〜く〜く〜く〜く
葉のたや巻の巻〜く〜く〜く
か〜く〜く〜く〜く〜く〜く
あ〜く〜く〜く〜く〜く〜く
六月や月おえ〜く〜く〜く 拂

小倉原

母〜く〜く〜く〜く〜く〜く
山里い〜く〜く〜く〜く〜く

人妻〜〜〜
初瓜を門〜〜〜
三日月と〜〜〜
阿〜〜井や小魚と〜〜
播人や山お〜〜のけ〜〜

無限有限命

此屋も不呂〜〜
猪やを〜〜
ま〜のけや〜〜
子と〜〜

海山や扇落〜〜
夕暮る〜〜
乙松や今〜〜
小産〜〜
他の人〜〜

福乐坊を〜〜
これに〜〜

堀よけ〜〜
蝶鳴也〜〜
蝶鳴也〜〜
移り〜〜

豊年の考りもはあつたのの
蠅一つもさうな喜ばしき
世うよつたもさうな
侍も蠅を退かざるは
やれははる蠅の子を
もつ子やを
冬のはらひぬくあつた
冬は焼く日わさ
山蜂のたりの
山蜂のたりの

おの蜂とてはあつた

新五夜

涼もあつた

涼もあつた

涼もあつた

涼もあつた

涼もあつた

涼もあつた

涼もあつた

涼もあつた

涼しき色 縁陀成佛の味を
学常今亦しとて 涼風を
敷村の裏に之をねて夕涼
魚と古の桶ゆもあつて夕涼
此月も涼しき色を以てあつたり

人形町

人形町茶をまきまきとて涼し
の涼人形町に居候なりなり

龍子

龍子 龍子汁の實を釣脊戸の海

きつり 餅 涼しき色

涼風の笑ひ納めを、涼しき色
涼風の中を、涼しき色
涼しき色 隣の井戸に、涼しき色
梅と涼しき色 門の内

江戸狂人

紗あしをまきまきとて涼し
おと 狂人 涼しき色

下りも下り下りの中園の涼しき色
分はよりの涼しき色

裏書屋のはきいんは信也

涼風の曲りと移つて来たるもの
花の家や蓮子吹送る夕葉儘
露は水よ出ゆく露の葉や
あつちよりきこゆるはるる歌
赤尾もつて先ねよかきる落るれ
白井峠より
信濃路の山の麓にありる里の
路の葉をみんと宿にきりる里の

葉書あや

暑き秋の麓にありる里の
末直伝をいつとよきもの
露南つてきこゆるはるる歌
あつちよりきこゆるはるる歌
夕立やけり燈直伝の
蟻のそよ風の峰より
湖水の出現しるる雲の峰
投ねたる足先たりる雲の峰
川移れしるる川もあつち
川いりて地盤のよきもの

玉川

上三十

萩古も色をあるはやみまゝに
麻の葉子倍鈔量も流しあり
形代をく吹くを萩もくま
形代をく吹くを萩もくま
竹籠のやをく吹くを萩もくま

